

*この電子書籍は縦書きでレイアウトされています。

*読む際のご注意、お断り等については[こちら](#)をお読み下さい。

目 次

半藤一利×佐藤優 初対談 今こそ読むべき14冊はこれだ！

戦争文学 悲惨な体験が書かせた傑作群 浅田次郎

天皇 戦勝にこだわった皇太后 原武史

陸軍 異質な時代の異質な軍事集団 保阪正康

海軍 O Bを激怒させた徹底検証 戸高一成

真珠湾攻撃 米英の策略にハマったのか？ 春名幹男

ビルマ戦 「大東亜戦争」の生の記録 古処誠二

戦時下の日常 衣食住、価値観を蝕むもの 中島京子

外交 成功か？ 失敗か？ 戸部良一

慰安婦 事実を見据えるために 秦郁彦

戦争と女性 銃後で遊郭で、翻弄された姿 梯久美子

特攻 生き残った者の苦悩 門田隆将

戦略爆撃 日本から始まった「空爆の時代」 安富歩

兵士 神から犠牲者へ 一ノ瀬俊也

沖縄戦 極限状況を迫体験する 又吉栄喜

タイトルをクリックするとその文章が表示されます。

※本コンテンツは週刊文春2015年5月7・14日号に掲載された記事を再構成したものです。

戦後70年記念企画

半藤一利・佐藤優 初対談

あの戦争を知るために今こそ読むべき本はこれだ！

敗戦から**70**年目の夏が来る。年々戦争体験者が減る一方、世界に硝煙が消えることはない。わが国の周辺にもキナ臭さが漂う今だから、過去に学ぶ意味は高まる。戦火に追われた経験を知り、国家の失敗の本質を探る。明日のために読むべし！ 怒濤の**54**冊徹底ガイド。

半藤『レイテ戦記』『空気』の研究……佐藤『日本のいちばん長い日』『戦艦武蔵』……

半藤一利



佐藤優

今こそ読むべき14冊はこれだ！

はんだかずとし／1930年東京生まれ。作家。東大文学部卒業後、文藝春秋入社。「週刊文春」「文藝春秋」編集長などを歴任。『漱石先生ぞな、もし』『ノモンハンの夏』『昭和史』など著書多数。

さとうまさる／1960年東京生まれ。作家・元外務省主任分析官。同志社大学大学院神学研究科修了後、外務省入省。『国家の罌』『自壊する帝国』『私のマルクス』『世界史の極意』など著書多数。

半藤一利が選んだ本

『レイテ戦記』(上・中・下)

大岡昇平／中公文庫

『戦艦大和ノ最期』

吉田満／講談社文芸文庫

『「空気」の研究』

山本七平／文春文庫

『軍艦長門の生涯』(上・中・下)

阿川弘之／新潮文庫★

『断腸亭日乗』(全七巻)

永井荷風／岩波書店★

*『摘録 断腸亭日乗』(上・下)岩波文庫版あり

『歌集 形相』

南原繁／岩波文庫

『東京の戦争』

吉村昭／ちくま文庫

『戦中派不戦日記』

山田風太郎／角川文庫

★＝絶版・品切等のため新刊書店での入手は難しい

佐藤 優 が選んだ本

『日本のいちばん長い日 決定版』

半藤一利／文春文庫

『戦艦武蔵』

吉村昭／新潮文庫

『戦艦大和ノ最期』

吉田満／講談社文芸文庫

『沖縄決戦—高級参謀の手記』

八原博通／読売新聞社★

『戦争と人間』(全九巻)

五味川純平／光文社文庫★

*但し澤地久枝氏による註のみを推薦

『東京裁判』

スミルノーフ、ザイツェフ／大月書店★

『細菌戦用兵器ノ準備及ビ使用ノ
廉デ起訴サレタ元日本軍軍人ノ
事件ニ關スル公判書類』

外國語圖書出版所／モスクワ・一九五〇年★

★＝絶版・品切等のため新刊書店での入手は難しい

佐藤 著者の半藤さんを前にしてなんですが、私がこの機会にいちばんに挙げたい本は、やっぱり『日本のいちばん長い日』です。

半藤 ありがとうございます。無理してませんか（笑）。

佐藤 いえ、この本は本当にすごいですよ。昭和二十年八月十四日の正午から翌十五日の玉音放送までの二十四時間を、徹底的な取材と証言で再現され、映画にもなりましたね。あらためて伺いますが、執筆動機はどんなことだったのでしょうか。

半藤 当時私は文藝春秋に勤めていたんですが、編集者仲間と太平洋戦争を勉強する会を作ったんですね。旧軍人や官僚や、様々な人を呼んでは話を聞いた。すると知らないことばかり出てくるし、当事者でも案外、自分が直接関係してない部分は知らないんです。ならばいろんな人に聞いて、いったいあの日に何が起こったのかを再構成してみようと思ったんですね。

佐藤 ノンフィクションを書いている者として、この作品に畏怖にも似た感情を抱くのは、描写に余分な形容詞が一切ないところです。

半藤 そうですね。たとえば昭和天皇は取材できませんから、侍従や身近に接した人に聞くわけです。だけど、天皇が「微笑みながら言った」とか「怒りを込めて言った」というような表現は使わなかった。ついつい、臨場感を出したくなっちゃうんですけどね。でも少なくとも二人以上の証言が合わなければ、採用しないと決めています。

佐藤 内容もさることながら、事実に対する厳しい姿勢が、まさにこの本をいま読むべき本たらしめていると思うんです。というのもいま、敗戦から七十年が経ち戦争は遠くなったのではなくて、新たな戦争が近づいてきている気配を濃厚に感じている人が少なくない。

半藤 私もその危機感をひしひしと感じています。

佐藤 ロシアのプーチン大統領が「（クリミア併合の際に）核兵器を臨戦態勢に置く用意があった」と言ったり、安倍総理が自衛隊を「わが軍」と言ったりしている。一方で戦争の物語の読み替えが盛んに行われていて、「美しい日本人像」ばかり押し出したり、実証的なところからどんどん離れていっているような気がします。

半藤 日露戦争も七十年たった頃には、美談がちりばめられた神話になっちゃいましたからね。それは歴史の運命でもあります。そこでもう一度事実に戻るといことは、非常に大事だと思います。その意味で、私はやはり『レイテ戦記』を勧めたいですね。

佐藤 大学生の時に初めて読みましたが、背筋が寒くなるような本ですね。

半藤 戦争とはどういうものかが、いちばんわかる本だと思いますよ。将軍も参謀も兵もなく、等しく戦場にぶち込まれて、いかに非人間的な行動をし、残酷な、非情なことを行うかを書き切ったすごい本です。いかんせん細部にわたりすぎ、分厚い文庫で三冊ですから、一般の読者にはとっつきにくいかもしれない。大変だったら「十 神風」（上巻）だけでも読んでほしい。

佐藤 私が勧めたいのは「三十 エピローグ」（下巻）の一文。アメリカの砲撃で日本占領下のフィリピンは大打撃を受けるんですが、「フィリピン人はこれらの損失を、白い天使アメリカ人に猿のような日本人を追ひ払ってもらうために堪えた」。いま歴史修正主義的な人は、フィリピンを日本が解放したような言い方をしますが、そんな話じゃないんです。

半藤 修正主義というか、知らないだけじゃないんですか。知らないものを修正しようがないもの。

佐藤 なるほど（笑）。今回唯一、二人とも挙げたのが、『戦艦大和ノ最期』ですね。米軍が上陸した沖縄に向かって出撃し、撃沈された戦艦大和に乗り組んでいた吉田満さんが書いた作品。漢字とカタカナによる文章が特徴的です。

あまりにむなしい武蔵の最期

半藤 これは戦中の日本人の周りにあった文体で、それが感動を呼ぶんです。今ではもう誰も書けません。私がいちばん好きなところは、最後の方に出てきます。「ワレ果シテ已レノ分ヲ尽セシカ 分ニ立ッテ死ニ直面シタルカ」。

「ワガ分」とは自分の役割とか、義務でしょうか。なすべき事です。吉田さんは、生き残ったことに対する「自分の分」を本気になって尽くそうとしたんでしょう。

佐藤 イデオロギーや宗教に吸収するんじゃなくて、事実をできるだけリアルに書いていく。それが鎮魂になるという点で、『太平記』の系譜にあると言えるかもしれません。

半藤 確かにそうですね。

佐藤 ただこの本は、当事者が書かれた本として素晴らしいと思いますが、実証的に様々な批判を免れていないことにも留意するべきではないかもしれません。大和の沈没後、救助艇に群がる漂流者に対して船上の下士官が「用意ノ日本刀ノ鞘ヲ払い、犇メク腕ヲ、手首ヨリバッサ、バッサト斬リ捨テ、マタハ足蹴ニカケテ突キ落トス」という部分は著者が後から追加したのですが……。

半藤 あり得ないですよ。

佐藤 大波に揺れている救助艇の上で、斬れるわけがないんです。

半藤 劇的効果を狙ったんでしょうが……、私、吉田さんは酒呑み友達でもあったんですけど、残念ですね。

佐藤 それに比べて、吉村昭さんの『戦艦武蔵』の綿密な取材と事実に徹する姿勢には感服してしまいます。この作品、全編の七割ほどを不沈戦艦・武蔵を建造するまでが占め、沈没する時の話が二割、活躍なんて一割くらいなんですよね。

半藤 作品のほとんどは多くの人間がものすごい膨大なエネルギーをかけて一つのを造り上げていく過程なんです。

佐藤 何しろ、建造中の武蔵を隠すための軽くて水に対して丈夫な、巨大なカーテンを造る、そのために必要な^{しゅうろ}棕櫚が大量に買われて品薄になっている、という話から始まる。

半藤 それだけのエネルギーをかけて建造したのに、あまり活躍することなくレイテ湾にいく途中の、一日目で猛攻撃を受けて早々に沈んでしまう。本当に虚しいですよ。

佐藤 武蔵が艦首から沈んで行くとき、スクリューが海面に浮いてくる。すると海に投げ出された乗組員が、スクリューにより登ろうとする。沈没に巻き込まれたら死ぬしかないんですけど、そうするしかない人間の生存本能が実に印象的です。

半藤 吉村さんは武蔵の護衛の駆逐艦の乗組員から話を聞いているんですね。

佐藤 他の作品を觀ても、リアリズムに徹して想像で加筆する人ではない。

半藤 ええ。当事者から聞いた話でも、信じられなかったらカットするんですよ。

非合理を認める日本の「空気」

佐藤 ただ、極度に事実から遊離しない限り、戦争の記録に物語性があるのは構わないと思うんです。半藤さんが挙げられた『軍艦長門の生涯』は私も大好きな作品です。連合艦隊旗艦であった長門のまさに「生涯」としか言いようがない運命。

半藤 近代日本のあり様が、艦を通してよくわかる。最後にアメリカの原爆実験の標的とされ、ビキニ環礁に没していく。

佐藤 そこに感情移入してしまうわけですが、同時に武装解除された日本でアメリカが詳細に長門を調べ尽くすあたり、敗戦国の悲哀がリアルに伝わってきます。

半藤 長門を標的にした原爆実験の様子からは、アメリカがまだ核兵器の威力というのをよく分かっていなかった、過小評価していたのではないかな。その意味では現代の象徴でもある。

佐藤 こうした素晴らしい作品がある一方で、やはり人間は物語を作ってしまう動物と思うのは、沖縄守備隊第三十二軍の高級参謀だった八原博通さんの『沖縄決戦』。彼は司令官の牛島満中将与長勇参謀長が首を切って自決するのを見届けたと書いています。ところが元沖縄県知事の大田昌秀さんがアメリカの国立公文書館で見つけた写真では、首が付いていた。

佐藤 ええ、そのことに疾しさを感じていたから、記憶を変容させてしまったのではないかなと思うんです。それでも『沖縄決戦』が重要なのは、この本が沖縄以外での沖縄戦のベーシックな認識を作ったからです。一方で沖縄県だけは民間の視点から沖縄戦を見る『鉄の暴風』が地になっているから、戦争認識の違いが生じていると思います。

半藤 八原さんの立てた持久作戦で、司令部がどんどん南部へ下がつていく。それで沖縄の人たちがどんどん戦火に巻き込まれていくわけですよ。首里決戦で戦闘を終えていれば、民間の死者は五分の一くらいですんだんじゃないですか。

半藤 そうなんですか。私と同じ年。大変な体験をされたんですね。

半藤　私も沖縄の何人からも、そう聞きました。

半藤　なるほど、そうですか。山本七平さんの『「空気」の研究』は、まさに戦艦大和が沖縄に特攻に行く話から始まります。沈むに決まっているのに行くというのは、まったく非合理的なのに、なぜか当然行くべきであるという論理を日本人皆が認めているという、日本独特の「場の空気」について考えた本です。山本さんは和の精神とか、一丸になることを尊ぶ日本人の心性を書かれていますが、これ、現代の日本でも少しも変わらないんじゃないですか。

半藤 ソ連から東京裁判を見た本ですね。日本の自衛戦争史観を木端微塵にしつつ、アメリカにも正義はなかったとやっつけた。

半藤 ソ連のプロパガンダと言えば、この『細菌戦用兵器／＼』は生物・細菌兵器を研究していた七三一部隊のソ連における秘密裁判の記録ですね。いつ頃読まれたんですか。

半藤 七三一部隊のタネ本とえば当時はこれしかなかったのですが、ソ連は日本人に見せるためだけにこの本を造ったのがすごい。読み進めるのは大変ですけど、当時の日本軍が大陸で何をしようと考えていたのがよく分かりますね。

半藤 この荷風の日記は昭和五年ごろから昭和二十年まであたりを丁寧（ていねい）に読むと、戦時中の庶民生活がどんなであったのかがとてもよく分かります。戦時下の日本人が、いかに清貧（せいへい）でなかったかもよく分かる（笑）。

半藤 そう、そういう面白さもあるんですよ。岩波文庫で抜粋版もありますが、細部が命のこの日記ではナンセンス（笑）。ぜひ完全版を探してみてください。

戦争文学

悲惨な体験が 書かせた傑作群

浅田次郎

あさだじろう／1951年東京都生まれ。

日本ペンクラブ会長。終戦時の理

不尽な戦闘を描く『終わらざる夏』で

毎日出版文化賞受賞。



ノモンハン事件

一九四五年までの日本人が置かれていた状況を綴った作家には、傑作を一篇残しただけで今日では忘却された人が多くいます。悲愴な体験、記憶に衝き動かされて一作だけ書いた、あるいはその一作しか書けなかったのかもしれない。いずれにせよ、そういった素晴らしい小説の数々を、埋もれさせてはいけなと数年前に編纂された文学全集が『コレクション 戦争と文学』（集英社）です。

編集委員として携わる中で、こんな短編があったのかと最も印象深かったのが「鶴の書」（結城信一 第15巻収録）です。空襲を受ける東京での清らかな若妻との暮らし、その別離を端正な文章で書く。戦争の惨禍を、聖母子像の喪失と重ねて描き切った美しい小説です。どの言語に翻訳されようとも等しく伝わる、普遍的な価値が感じられます。

戦時中に戦争を書いた文学が、現代にまで伝わりにくい理由の一つに、表現の制約や検閲制度があるでしょう。そのせいで、後世の鑑賞に堪えるものが少なくなってしまう。「^{ウースン}呉淞クリーク」（日比野士朗 第7巻収録）は、この制約を見事にクリアしています。発表されたのは一九三九年。中国主要都市を占領し、国際社会の批判を受けて日本はいよいよ一触即発の窮状に迫り込まれている。しかし、その時期の検閲を通ったとは信じ難いほどに、この小説は戦闘の実相を仔細に描写しています。「検閲」の目で読んだなら戦場の勇敢さを書いているように見えるが、その実、読者には悲愴な読後感を残す。他に類を見ない、プロの仕事です。現代の我々が戦争というものを知る上で不可欠の資料ともいえるでしょう。

「呉淞クリーク」発表の数カ月後、ついにノモンハン事件が起き、ソ連とも戦火を交えることになります。あの戦争を考えるにあたり避けて通れないターニングポイントでありながら、昭和史のブラックボックスともされる戦闘を、冷静に描く名作が『静かなノモンハン』（伊藤桂一 講談社文芸文庫）です。ノモンハン事件については解っていないことが多く、小説にするのは至難の技です。司馬遼太郎さんが晩年まで「いつか書きたい題材」とされていたのは有名な話ですね。この史上まれに見る悲愴な負け戦を、著者は美しい、詩的な文章で描き出します。一体どこまでは事実で、どこからがフィクションなのか判らないほどの描写。若い頃に読んで衝撃を受けた一作です。

（談）

戦争

Nova Bibliotheca de bello

litterarum-Saeculi XXI

文学

戦時下の青春

コレクション
戦争と文学

15

集英社

伊藤桂一

itō keiichi

ノモンハン

静かな

講談社文芸文庫
Kōdansha Bungei bunko



天皇

戦勝にこたわつた 皇太后

原武史

はらたけし／1962年東京都生まれ。

明治学院大学教授。専攻は日本政

治思想史。『昭和天皇』で司馬遼太郎

賞受賞。近著に『皇后考』など。



昭和天皇

昭和が終わって平成になるや、天皇自身の独白録や天皇の側近、皇族の日記など、昭和天皇と戦争の関係を知る上で欠かせない重要な史料が次々に公開され、天皇研究が一気に進んだ。歴史学者の吉田裕が著した『昭和天皇の終戦史』（岩波新書）は、これらの史料をいち早く読み解き、天皇の戦争への関与を明らかにした研究として、いまなお読むに値する水準を保っている。とりわけ、「国体」の護持にこだわる天皇の行動原理を分析したⅦ章は秀逸だ。私自身が昭和天皇研究を始めるに当たり、常に座右に置いて参照した本でもある。

在野の作家による研究も紹介しておこう。ご存じ歴史探偵の半藤一利が著した『聖断 昭和天皇と鈴木貫太郎』（PHP文庫）は、一九四五（昭和二十）年六月に昭和天皇が大宮御所を訪れ、皇太后（貞明皇后）に会ったという事実注目する。おそらく両者の間には、戦争をめぐる激しいやりとりがあったに違いない。天皇は住まいの御文庫に戻ってから体調を崩し、政務を休んだのを機にようやく和平を決断したのではないかという解釈は、この著者にしかなし得ない鋭い「読み」であり、私自身も深く納得させられた。

最後の一冊として、『高松宮日記』全八巻（中央公論社）を挙げておきたい。この日記を虚心坦懐に読むと、高松宮は戦況が悪化し、サイパンが陥落する四四（昭和十九）年から、天皇との対立を深めているのがわかる。その一方で、戦勝にこだわる皇太后の動静も伝わってくる。敗戦後に天皇が退位を拒否した理由の一つは、退位すれば皇太子が未成年のため摂政を立てざるを得ず、その場合は秩父宮が病氣だから対立していた高松宮が摂政になる可能性が高いことがあった。またGHQも、占領政策に批判的な意見をもっていた高松宮に対して、警戒を怠らなかった。本書を読むと、そうした高松宮の時局に対する鋭い考察が、随所に見いだせる。

吉田 裕著

昭和天皇の終戦史



岩波新書

257

聖断

昭和天皇と
鈴木貫太郎

半藤一利

PHP文庫

陸軍

異質な時代の 異質な軍事集団

保阪正康

ほさかまさやす／1939年北海道生

まれ。同志社大学文学部卒業。著書に

『昭和史 七つの謎』など。現在『昭和天

皇実録 その表と裏』シリーズを刊行中。



中国戦線の日本兵

戦後70年の「戦後」は、太平洋戦争終結から70年を経過したとの意味になるのだが、これを機に「昭和陸軍」の内実を確かめてみたらどうだろうか。

昭和陸軍は、昭和10年代にはまったく近代の論理とは異なった軍事集団に変容している。

皇軍は神軍だなどと言いだす有様だ。この軍事集団を手つとりばやく理解するための3冊を以下に紹介しよう。

まず歴史探検隊が著した『50年目の「日本陸軍」入門』（文春文庫）が記述が平易で、具体的なエピソードを中心に書かれているのでわかりやすい。太平洋戦争開戦から50年目に書かれたが、「はじめに」には「この本の筆者は専門家ではない。読者から一步踏み出ただけにすぎない」とある。確かに昭和陸軍を専門家の目で見ると、木を見て森を見ずの愚を犯すことになる。しかし本書にはそれがない。

私はこの書が、昭和の初めから終戦までの20年を「際立って日本史の中で異質」と見ていることに説得力があると思う。兵隊になるとはどういうことがわかってきて、日本人の国民性がどう変容していくかが読み物風に理解できる好著である。

続いて拙著の紹介になるのだが、『昭和陸軍の研究（上下）』（朝日文庫）を読んでもらいたいと思う。あえて自著をとりあげるのは、昭和陸軍の折り折りの事件や事象を「論」として語るのではなく、「兵士」一人一人の体験や考え方を通して描いたからである。

硬直した軍事論を排し、たまたまこの時代に生きた人たちが、戦争に出会ってしまい、どのように生きなければならなかったか、という視点で書いたので、軍事集団を新しい目で見ることができるように思う。

昭和陸軍の構図は、やはり日本人論の一翼を担うべきだとも私は考えている。その点を含んで、戸部良一、寺本義也ら6人の専門家による『失敗の本質』（中公文庫）を読んではしい。なぜ昭和陸軍は、太平洋戦争で戦略、戦術に失敗したのか、を丹念に分析している。

この書は組織論ということになるが、それぞれの失敗には、共通の因（たとえば情報分析の甘さなど）があることがわかる。

これらの教訓はすべて今に通じているともいえる。

歴史探検隊

文春文庫



50年目の日本陸軍入門

A black and white photograph showing Japanese soldiers in the field. In the foreground, a soldier in a helmet and combat uniform is operating a large artillery piece, possibly a howitzer or a heavy mortar. In the background, other soldiers are visible, some working on equipment. The scene is set in a grassy field.

保阪正康

Hosaka Masayasu

昭和陸軍 の研究 ①

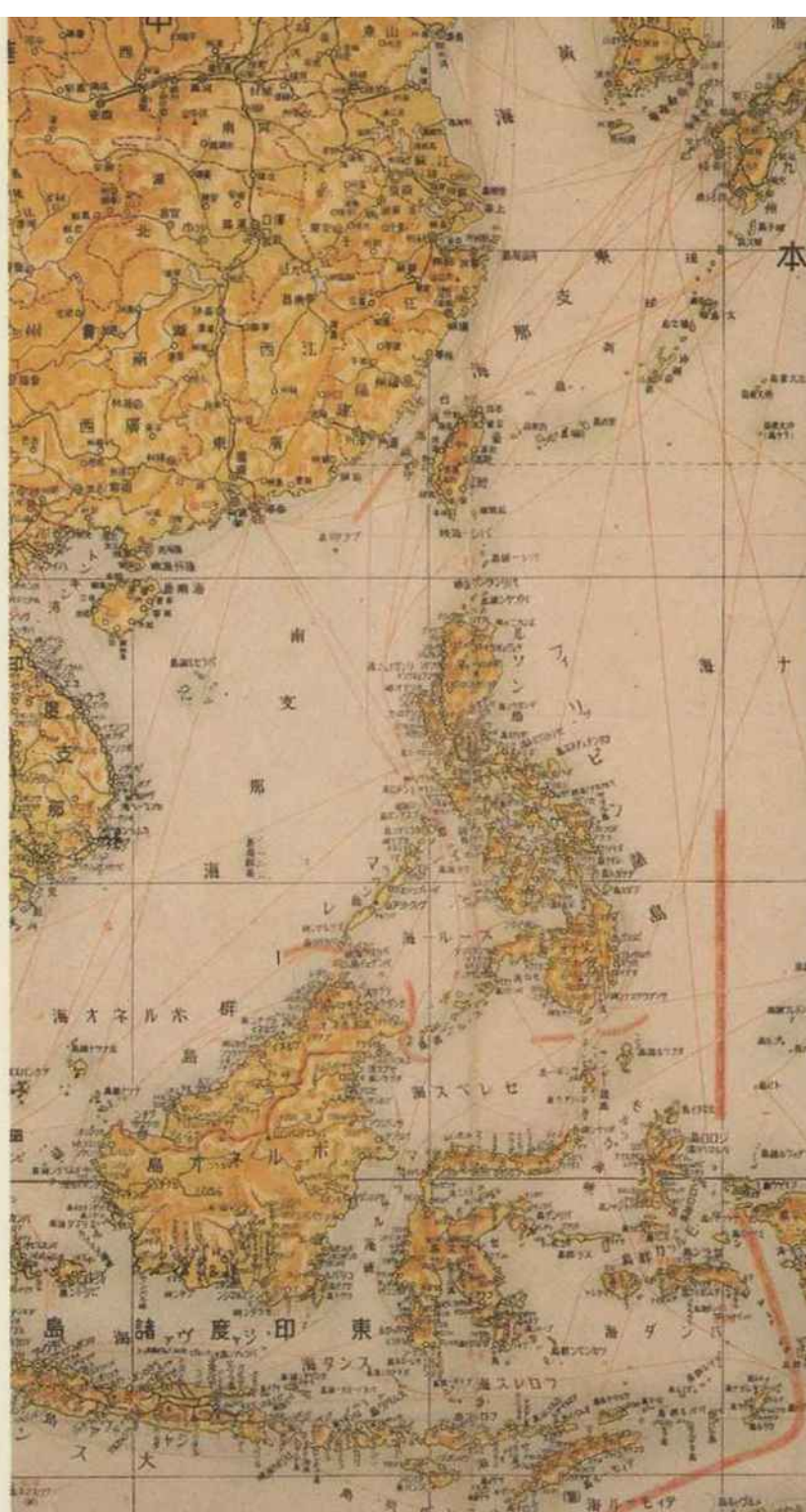
朝日文庫

失敗の本質

日本軍の組織論的研究

戸部良一 寺本義也
鎌田伸一 杉之尾孝生
村井友秀 野中郁次郎

中公文庫



海軍

OBを激怒させた 徹底検証

戸高一成

とだかかずしげ／1948年宮崎県生

まれ。海軍史研究家。呉市の大和ミュ

ージアム館長。著書に『海戦からみた

太平洋戦争』など。



ラバウル基地の山本五十六

日本海軍を三冊で知る。というのは無理なのだが、海軍の体質にまで及ぶ問題意識を持って書かれた、池田清『海軍と日本』（１９８１、中公新書）は落とせない。著者の池田清は、海軍兵学校七十三期生、摩耶乗り組みで、あ号作戦に参加、伊四七潜水艦で終戦を迎え、戦後東大法学部に学んだ。海軍での体験から、改めて海軍を研究しなおした著者は、海軍を、独善的情勢判断、艦隊決戦主義の盲信と見た。また、次第に排除されていった良識的な指導者、暴走する陸軍にブレーキが掛けられず、遂には共犯者となった、見掛け倒しのもろい体質、と、次々に問題点を掲げ、ては検証したのである。この問題意識こそが本書の面目であろう。当時多くの海軍ＯＢをして、池田はけしからん、と言わしめた事実こそ、読むに値する本である証明と言えよう。

次いで、連合艦隊司令長官として、日本艦隊を指揮した山本五十六の生涯を描いた阿川弘之『山本五十六』（１９６５、新潮文庫）が挙げられる。山本の伝記は数多く、どれを薦めるべきか悩むほどである。しかし、この一冊といえ、やはり阿川弘之の本書に落ち着く。阿川の山本伝は、驚くほど多くの資料と、山本に関わった海軍関係者への取材によって得られた掛け替えの無い、暖かな山本のエピソードが積み上げられている。もともと、それまでの山本伝には余り書かれてこなかった女性関係の記述が多く、やや問題を起こしたという。海軍という世界の雰囲気を知るにも必読の一冊と言えるであろう。

最後に、最前線で戦った兵士の記録として白眉の一冊と言える角田和男『修羅の翼』（２００２、光人社ＮＦ文庫）を推したい。著者は、日中戦争から終戦まで、終始零戦で闘い続けたばかりでなく、レイテ戦においては、特攻の戦果確認機として特攻機の突入を見届け、後には自身も特攻を命じられたのである。一人の純朴な青年が歩んだ、昭和という時代の悲劇を、これほど克明に残した記録は多くは無い。

池田 清著

海軍と日本



中公新書

632

阿川弘之

山本五十六

上

新潮文庫





Tsunoda Kazuo
角田和男

修羅の翼

零戦特攻隊員の真情

真珠湾攻撃

米英の策略に ハマったのか？

春名幹男

はるなみきお／1946年京都府生まれ。

共同通信社論説副委員長などを経て、

早稲田大学客員教授。著書に『秘密

のファイル―CIAの対日工作』など。



沈む戦艦アリゾナ

真珠湾攻撃は「ルーズベルトの陰謀」だったかどうか、今なお論争が続いている。ロバート・B・スティネット著『真珠湾の真実』（文藝春秋）が陰謀論の根拠としているのは、真珠湾攻撃の前年、一九四〇年に海軍情報部（ONI）極東課長アーサー・マッカラム少佐が作成した「戦争挑発行動八項目覚書」だ。

情報の自由公開法により発掘したこの文書では、日本を挑発して対米戦争を仕掛けさせる八つの行動を挙げている。シンガポール英軍基地の使用、蒋介石政権への援助、ハワイの米艦隊主力維持、対日経済的圧力など。スティネットは、ルーズベルト大統領がこれを読んで、日本を挑発する政策をとったとみている。

米国内では戦争不介入の世論が強かったが、日本側が先に対米攻撃すれば、米国は「裏口」からの参戦が可能となり、欧州戦線でドイツと戦って英国を支援する、という策略である。

実は、日本側もそんな動きを読んでいた。野村吉三郎駐米大使は八月十六日付本省向け公電で「裏口で日米戦争が始まった場合、欧州戦線に米国を参戦させる期待が高まる、と英国は考えている」と記した。米国は日本の外交暗号を解読していたので、日本側のこうしたやりとりをすべて把握していた。

それでも日本は米国の挑発に乗ってしまう結果になった。日米交渉は悪化の一途をたどり、参謀本部編『杉山メモ』（原書房）によると、一九四一年十一月五日の御前会議では「対米英蘭戦争ヲ決意」し、武力行使の時期を十二月初頭と決定した。ハル・ノートを拒絶して、昭和天皇は十二月一日の御前会議で「已ムヲ得ヌコトダ」と開戦を最終決定した。

「暗号表を焼却せよ」との公電が在外公館向けに発せられ、米国は日本の攻撃が近いと認識した。だが、日本の海軍暗号はまだ解読できておらず、連合艦隊がいつどこを攻撃するのか米国は察知していなかったとする学説が支配的だ。

真珠湾攻撃後、米国は対日宣戦を布告。ルーズベルトとチャーチル英首相の間の書簡集『Roosevelt and Churchill, (Da Capo Press)』によると、ルーズベルトは十二月八日付のチャーチル宛書簡で「われわれはあなたと大英帝国国民とともに同じボートに乗った」と運命をともにする決意を示した。まさに策略通りの現実になったのである。

真珠湾の 真実

ルーズベルト
欺瞞の日々

**DAY OF
DECEIT**
THE TRUTH ABOUT
FDR
AND PEARL HARBOR

ロバート・B・スティネット

妹尾作太男=監訳
荒井稔・丸田知美=共訳

杉山

原書房

メモ

參謀本部編

一九三〇、ロンドン海軍軍縮會議で日英米三國条約に調印 一九三一年、滿鉄、張學良と滿蒙鐵道交渉 三月事件 朝鮮總督に宇垣一成、中村大尉事件 万宝山事件 閩東軍が柳永潮事件を口実に滿州事変 國際連盟撤兵勸告 一九三二、リットン調査團來日 滿州國建國 陸海軍將校らが犬養首相射殺 五・一五事件 警視庁特高警察部設置 ロサンゼルスにリニンビック 一九三三、閩東軍熱河作戦 三陸大地震 津波 滿州移民計画大綱 皇太子明仁誕生 一九三四、溥儀滿州國皇帝に 室戸台風 一九三六、ロンドン海軍軍縮條約の破棄を通告 二・二六事件 ベルリンでオリニンビック 一九三七、死なう困事件 盧溝橋で日 本軍南京占領 一九三八、御前會議 支那事變處理 根本方針 國家總動員法公布 張鼓峯事件 一九三九、閩門海底トンネル 本軍北滿佔領 日使伊米會議 一九四〇、汪兆銘南京國民政府樹立 葵生會議 國策協議 基本國策案 國防國家建設 日本軍北滿佔領 日使伊米會議 一九四〇、汪兆銘南京年記念式典 御前會議 支那事變處理 要綱決定 一 通達 野村大使、ハル國務長官と日米交渉開始 御前會議 情勢の推移に伴う帝國國策要綱 對ソ戰準備、南部仏印進軍 日航空機用ガソリン禁輸 御前會議 帝國國策遂行要綱 一九四二、日本軍マニラ占領 シンガポール占領 ラングーン占領 ハル、ノート回答 真珠灣攻撃 米英に宣戰布告 戰艦一大和 一、半島占領 大東亞政略指導大綱決定 マレー、第印の 編入、ビルマ、フィリピン、の獨立 大東亞會議開催 一九四四、大本營インパール作戦を認可 米軍マーシャル群島上陸 大陸打通作戦、サイパン島上陸、マリアナ沖海戦、サイパン島玉砕、閣議 國民總武裝決定、竹槍訓練等開始 学徒勤勞令 人間魚雷雷天基地設置 米軍沖縄攻撃 神風特攻隊編成、レイテ沖海戦、東海大地震・津波 一九四五、最高戰爭指導會議 本土決戦など戦争指導大綱を決定、ソ連が日ソ中立條約の不延長通告、広島・長崎に原爆投下、ボツタム宣言受諾を回答 終戦の詔勅、玉音放送

上

ビルマ戦

「大東亜戦争」の 生の記録

古処誠二

こどころせいじ／1970年福岡県生

まれ。戦争文学で高く評価され、『メフ

エナーボウンのつどう道』『ニンジアン

エ』『中尉』などビルマを多く描く。



ビルマで降伏する日本軍将校

兵士等がビルマで綴った記録は持ち帰りを許されなかった。残念という他ない。戦後の風潮が影響していないだけに、その価値は今となつては計り知れない。

戦後の風潮にはむしろアメリカが大きく関わっている。戦後メディアが取り上げてきたあの戦争の大半も対米戦である。その内容は「太平洋戦争」と呼ぶにふさわしい。

ビルマ戦を通して見るあの戦争は「大東亜戦争」である。読書の目的に思考の充実があるならば、ビルマ戦を扱った本に目を通すことは大変意義が深い。

左記の三冊は、努力や幸運を経てビルマでの記録を持ち帰ることのできた方が著した書籍である。記録をそのまま載せたものは言うに及ばず、記録を元に書かれたものも貴重である。

●林禮二著『ビルマ戦中日記 死と生』連合出版

事象を冷静かつ哲学的に分析する記述が特徴的である。冤罪で死刑となった戦犯に触れるおりにもその筆致に変化はない。人は戦地において何を思い何を考えるか。そのひとつの例として手に取るべきだろう。捕虜収容所における各軍司令官等を一行で評したページは、ビルマ戦に多少なりとも関心のある者ならば興味をひかれるはずである。

●桑野福次著『ある商社員と大東亜戦』旺史社

連合軍の本格的反攻が始まる前のビルマが生活目線で書かれている。得難い一冊である。軍属であった著者の視点には、それだけでも注目の価値がある。素質の低下していく日本の将兵、若い女を連れて逃げる敵軍将校の逸話、アヘン密売者の行動などなど、他の書籍ではなかなかお目にかかれない記述が多い。

●宮部一三著『ビルマ最前線1』叢文社

著者は、捕虜収容所で支給されたトイレットペーパーに戦中の記憶を綴って持ち帰ったという。したがって厳密には戦中の記録と言えまいが、その執念は戦争の一面を後人に示している。昭和十九年にビルマ入りした第五十三師団が師団としての行動をほとんど取れなかったことが本書からはよく分かる。多くの戦記で低く評価される同師団に対する認識を改めさせる内容である。

ビルマ戦中日記

死と生

林
禮二

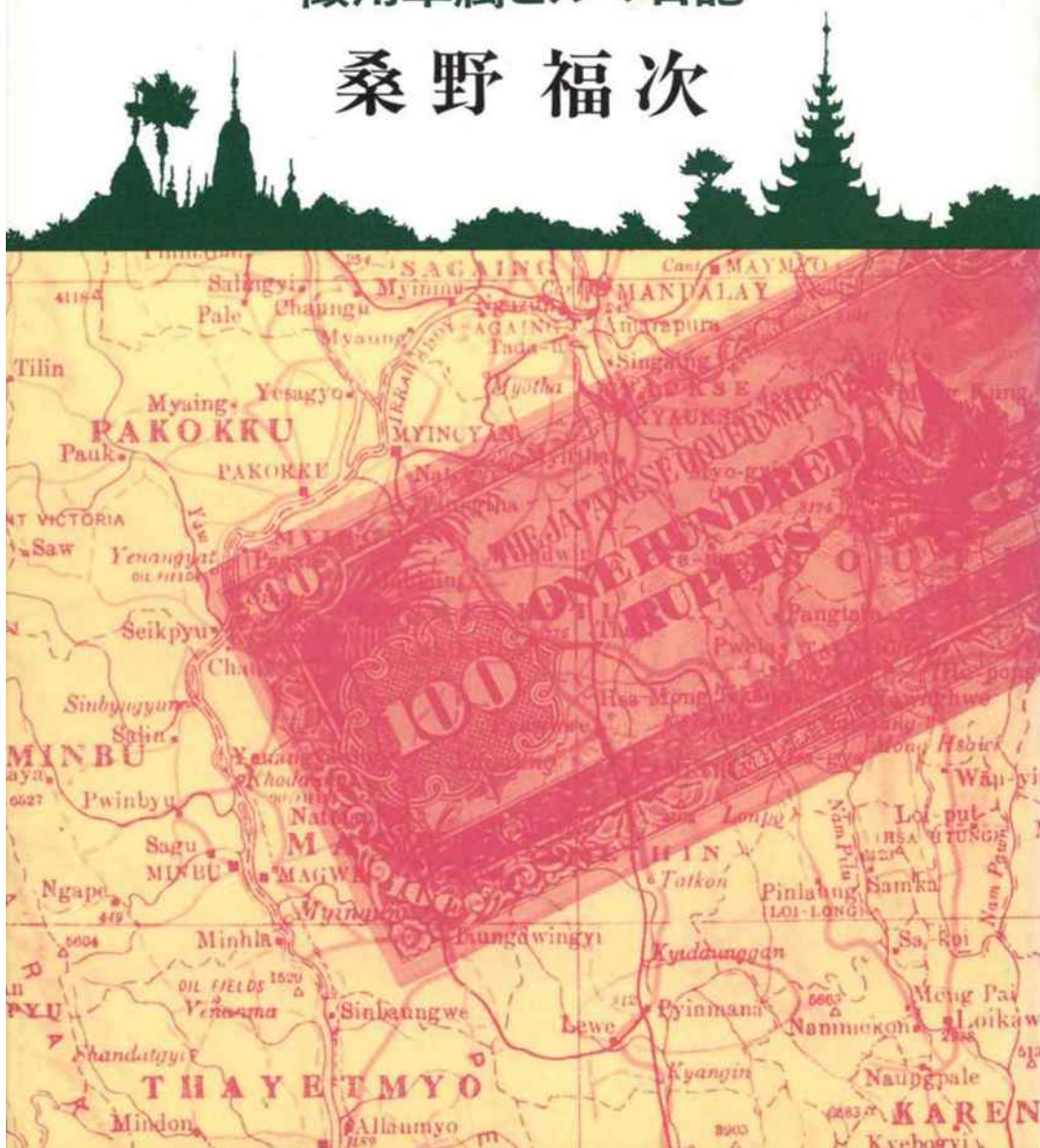
連合出版

★無名戦士の記録シリーズ

ある商社員と大東亜戦

— 徴用軍属ビルマ日記 —

桑野 福次



ビルマ

最前線
〔1〕

宮部一三



戦時下の日常

衣食住、
価値観を蝕むもの

中島京子

なかじまきょうこ／1964年東京都

生まれ。戦前から戦時中の家庭を描く

『小さいうち』で直木賞を受賞。著書

に『女中譚』『かたづの!』など



まずは、永井荷風の日記『断腸亭日乗』。太平洋戦争開戦の年に既に六十歳を過ぎていた荷風だけに、世間の大騒ぎと距離を置いた筆が一貫して鈍らない。たとえば昭和十六年十二月十二日の日記。「開戦布告と共に街上電車その他到處に掲示せられし広告文を見るに、屠^{たわむれ}れ英米我らの敵だ進め一億火の玉だとあり。或人 戯^{たわむれ}にこれをもじりむかし英米我らの師困る億兆火の車とかきて路傍の共同便処内に貼りしといふ」。日記は多く残っていて、山田風太郎、高見順、伊藤整、古川ロッパなどのものも、それぞれおもしろい。

次は回想録で、田辺聖子『欲しがりません勝つまでは』。十三歳、女学校二年生で開戦を迎えた著者は、「天皇陛下と祖国・日本のために、命をすてるのだと、かたく決心している」軍国少女だった。作家の筆は、戦時中どんな価値観がその場を支配していたかを、偽ることなく描き出す。文学少女がどんな本にのめり込んだか、戦争が始まってもいつごろまでおいしいものが食べられたのか。世の中はどんなふうに変化して行っただのか。ラスト、終戦の廃墟と混乱の中で、十七歳に成長している少女は、（自分のあたまで考えて判断するのが一ぱん大事やないかしらん）という結論に辿り着く。

最後の一冊は、研究本、斎藤美奈子『戦下のレシピ』。婦人雑誌の記事から、毎日食べるごはんの変遷をピックアップして解説する。昭和十六年春には、「鉄兜マッシュに軍艦サラダ！」と名前も勇ましい洋食が誌面を飾るが、配給の食材も乏しくなり、米は不足し、肉はなくなり、都市部の空き地はみな畑に代り、誰もが鋤クワ持って芋やかぼちゃを作り、とうとう道端の雑草が「新鮮な野菜」、茶がらも「野菜」、たんぱく源は「魚粉」となっていく過程を追う。非常に身につまされる。日本だけの話ではない。第二次大戦終了後の世界を、覆うように支配していたのは「飢え」だった。戦争がいかに人々の生活を破壊するか、考える材料をくれる一冊である。

永井荷風

新版
断腸亭日乗

第一卷

岩波書店



田辺聖子

欲しがリ
まかせん
まづは

ポプラ文庫

斎藤美奈子

戦下のレシピ

太平洋戦争下の食を知る



岩波アクティブ新書 37

ACTIVE

岩波書店

外交

成功か？ 失敗か？

戸部良一

とべりょういち／1948年宮城県生

まれ。帝京大学教授、防衛大学校名誉

教授。共著に『失敗の本質』、単著に

『逆説の軍隊』など。



ワシントン日本大使館

大東亜戦争をめぐる外交史の本とくれば、開戦外交か、あるいは終戦外交に関わる著作を挙げるのがふつうだろう。だが、私はまず、そのどちらでもない戦時外交を扱った波多野澄雄『太平洋戦争とアジア外交』（東京大学出版会）を挙げたい。この本の中心人物は外相、重光 葵^{まもる}である。重光は、アジア諸地域の早期独立を促し、独立したアジア諸国と平等互恵の関係を結び結ぼうとしたとされる。その努力は一九四三年の大東亜共同宣言に結実した。これによって重光は日本の戦争目的を「自存自衛」から「アジア解放」に転換させ、たとえ戦争に負けても、日本が何のために戦ったのかを戦後への遺産として残そうとしたのだという。はたして、それは本当に遺産というにふさわしかったのか、それとも歴史への単なる弁明（言い訳）にすぎなかったのか、本書の評価もそのあたりは必ずしも明快ではない。ただし、その明快でないところをあらためて考えさせてくれる良書であることは間違いない。

開戦外交については、須藤真志『ハル・ノートを書いた男』（文春新書）を挙げたい。もともと著者には日米開戦外交史に関する分厚い研究実績があり、この新書はそれを下地にし、その後の研究成果も盛り込んで平易に書かれている。戦争回避のために続けられた日米交渉は、駐米野村大使の「善意」による訓令逸脱もあつて、かなり込み入っているが、本書はそこを簡明に説明してくれる。日本側が最後通牒と受け取ったハル・ノートの作成にK G Bのエージェントが絡んでいたという問題についても、陰謀説を排して、冷静な分析がなされている。

終戦外交については、ちょっと迷うが、長谷川毅『暗闘』（中公文庫）を挙げるべきだろうか。日本に降伏を決断させたのは、原爆投下よりもソ連の対日参戦であった、とする著者の解釈はかなり論争的で、異論もあるだろう。ただ、日本の降伏に至るまで関係各国が繰り広げた虚々実々の外交の実態を知るためには、すぐ手に取れる好著と言えるだろう。

太平洋戦争と
アジア外交



文春新書

028

ハル・ノートを書いた男

日米開戦外交と「雪」作戦

須藤眞志



文藝春秋

闇闘

スターリン
トルーマンと
日本降伏

長谷川 毅

上



中公文庫

慰安婦

事実を
見据えるために

秦郁彦

はたいくひこ／1932年山口県生まれ。東京大学法学部卒業。『昭和史の謎を追う』で菊池寛賞受賞。『明と暗のノモンハン戦史』など著書多数。



日本軍の慰安所だったとされる建物（南京）

- ①吉見義明『従軍慰安婦』（岩波新書 一九九五）
- ②朴裕河『帝国の慰安婦植民地支配と記憶の闘い』（朝日新聞出版 二〇一四）
- ③熊谷奈緒子『慰安婦問題』（ちくま新書 二〇一四）

慰安婦問題が噴出したのは一九九一年から九二年にかけてである。筆者はそれを「ビッグバン」と呼んでいるが、その時から二十数年、浮沈はあったが現在も「女性的人格侵害」者として、日本は国際的批判を一身に浴びる窮地に立たされている。

この間におびたしい数の関連書や運動家のアピールが送りだされたが、そのなかで内外に圧倒的な影響力を発揮したのが吉見本である。国内では第二十五刷、累計九万二千部のベストセラーとなり、韓国語訳（一九九八）、英訳（二〇〇〇）、スペイン語訳も流通していると聞く。

英訳版に「性奴隷」（sexual slavery）という副題が追加されたように、著者は「慰安婦問題は日本軍の戦争犯罪」（吉田裕）という見方に立つ。

筆者は『慰安婦と戦場の性』（新潮選書 一九九九）などで、第二次大戦からベトナム戦争に至るまで、韓国をふくむ参戦諸国が慰安婦を利用していた事実があり、彼女たちは公娼（売春婦）という職業の戦地版にすぎず、日本軍慰安婦だけが批判的にされる理由は乏しいと反論してきた。

意外にも筆者と似た理解を示したのは、韓国世宗大学の朴裕河教授である。しかし強制連行や性奴隷説を否定し、「韓国軍、在韓米軍の慰安婦の存在を無視するのは偽善」と指摘した彼女は、慰安婦の支援組織から「親日的」だとして提訴された。

熊谷本は吉見と秦＝朴の中間的立場を取るが、論争の経過や争点を手際よく整理してくれているので、概説書としては最適だろう。ただし「フェミニズムによる挑戦」という観念論に傾き、韓国等の反日ナショナリズムに圧倒されがちな現実から目をそらしているのが物足りない。

吉見義明著

從軍慰安婦



岩波新書

384

帝国の慰安婦



朴裕河

Park Yuhwa

植民地支配と記憶の闘い

朝日新聞出版



熊谷奈緒子

Kumagai Naoko

慰安婦問題

CHIKUMA SHINSHO

……真の和解を目指して、日本がなすべきこと、責任を果たしていくべきことを提示する。慰安婦問題を、主観的かつ表層的、一面的に捉えることなく、客観的かつ多面的に理解することを目指していきたい。……

ちくま新書

1075

戦争と女性

銃後で遊郭で、 翻弄された姿

梯久美子

かけはしくみこ／1961年熊本県生

まれ。『散るぞ悲しき 硫黄島総指揮

官・栗林忠道』で大宅壮一ノンフィク

ション賞を受賞。



- ①上坂冬子『遺された妻　ＢＣ級戦犯秘録』（中公文庫）
- ②角田房子『墓標なき八万の死者　満蒙開拓団の壊滅』（中公文庫）
- ③上原米子『新篇　辻の華』（時事通信社）

巣鴨プリズンで絞首刑となったのは、Ａ級戦犯だけではない。横浜法廷で裁かれたＢＣ級戦犯52名も同じ場所で絞首刑になっている（他に銃殺1名）。①は、彼らの妻たちを訪ね歩いたノンフィクション。処刑されたＢＣ級戦犯の罪状のほとんどが俘虜虐待で、階級の低い兵や軍属も多くいた。一方、命令を下した上官は死刑を免れている場合が少なくない。遺された家族の苦難の戦後をたどりつつ、上坂氏はＢＣ級戦犯裁判のずさんさも明らかにしていく。同じ著者の『巣鴨プリズン13号鉄扉』とともに、かえりみられることの少ないＢＣ級戦犯の実相を後世に残した貴重な仕事。

②は、満蒙開拓団の悲劇を、長野県から送り出された開拓団を中心に、綿密な調査・取材によって追った労作。夫は動員され、引揚げの中心は妻たちだった。小説のようにドラマチックだが、すべての記述に資料または証言の裏付けがある。内容は克明をきわめ、著者がこの一冊にどれほどの時間と労力をかけたかを想像すると眩暈がしそうになるほど。角田氏には本間雅晴や甘粕正彦のすぐれた評伝もあるが、私にとっては本書がベストである。

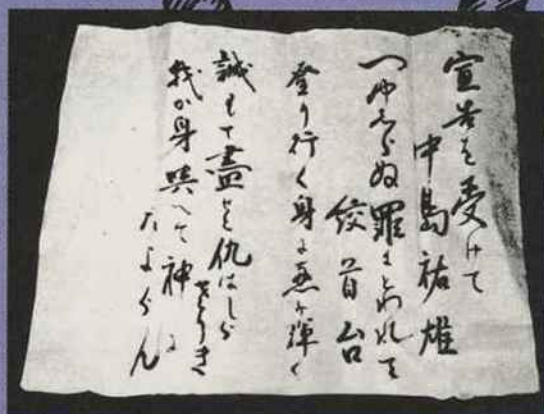
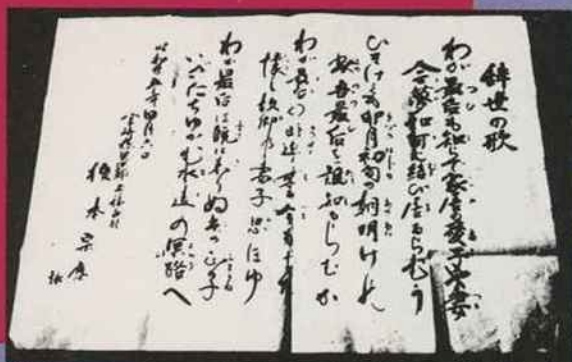
ＢＣ級戦犯と満蒙開拓団については、必要があつて調べたことがあるが、この２冊は資料的価値も高く、大いに助けられた。この人たちの仕事があれば永久に埋もれたままだった事実がある。読みかえすたび、ノンフィクションとはこうでなければならないと思う。

③は、沖縄の那覇にあった「辻遊郭」に4歳で売られてきた女性の一代記。辻には女たちを支配する男が一人もおらず、すべて女たちの自治に委ねられていた。本土の遊郭とは全く違う文化の中での、ジュリと呼ばれる美妓たちの不思議なおおらかな暮らし。だが戦争が始まり、戦場となった沖縄で、著者たちは思わぬ運命の変転を経験する。沖縄戦が従来にない視点から描かれ、戦後の沖縄も活写される。著者の前向きさとバイタリティに魅了され、ページをめくる手がとまらなくなる異色の自伝だ。

遺された妻

BC級戦犯秘録

上坂冬子



中公文庫

角田房子

墓標なき

八万の死者

満蒙開拓団の壊滅

中公文庫

新篇



上原栄子

辻の華

時事通信社

特攻

生き残った者の 苦悩

門田隆将

かどたりゅうしょう／1958年高知

県生まれ。『この命、義に捧ぐー台湾

を救った陸軍中将根本博の奇跡』で山

本七平賞受賞。



特攻隊員

『修羅の翼 零戦特攻隊員の真情』（角田和男・光人社N F 文庫）

『零戦ゼロファイター 老兵の回想』（原田要・桜の花出版）

『激烈に生きて』（長濱敏行・一粒書房）

ひとたび

神風特攻とは、一度突入を敢行すれば、九死に一生もない。すなわち「十死零生」の非情な戦法である。

私は、拙著『太平洋戦争 最後の証言』シリーズで、数年にわたって玉砕の戦場から生還した老兵たちを訪ね歩いたことがある。中には、もちろん元特攻隊員もいた。彼らが語る体験は、想像を絶するものだった。

ここに挙げた三冊は、いずれも特攻に深く関わった元搭乗員の筆になるものだ。私は著者である三人には、直接インタビューさせてもらっている。残念ながら角田和男氏は二〇一三年、九十四歳で大往生を遂げた。

支那事変に始まって多くの空戦に参加した角田氏は、やがて特攻機の直掩（ちよくえん 援護）の役目を負う。そして一九四四年十月、「葉桜隊」（はざくら）の大戦果の目撃者となった。自身も特攻出撃する当日、終戦になるという数奇な運命を迎える。だが、そのために戦後も深い苦悩の中で戦争そのものと向き合うことになる。

また原田要さんは南京攻略戦から真珠湾、ミッドウエーなど重要作戦に参加し、ガダルカナルの空戦では敵機と相討ちして重傷を負った元零戦パイロットだ。その後、教官として特攻隊員たちを育て、見送る立場となった。九十八歳の今も過酷な自身の体験を講演などで後世に伝えている。

長濱敏行さんは特攻兵器「桜花」を抱いて一式陸攻で沖縄に二度出撃した。一度目は天候不良で引き返し、二度目はグラマンの急襲を受け、被弾しながら交戦の末、奇跡的に喜界島に不時着して生還する。

この三作の特徴は、誇張も、美化も、そして卑下もない点である。あの時代に男子として生まれ、自らの使命と運命に対峙した若者の苦悩と行動が淡々と描写されているだけである。

運命に従う者を勇者という、とは田山花袋の至言だが、苛酷な運命から生還した三人の体験記は、時を超えて「生と死」、そして「運命」の不可思議さを問いかけてくる。



Tsunoda Kazuo

角田和男

修羅の翼

零戦特攻隊員の真情

シリーズ 日本人の誇り 9

零戦

ゼロファイター
ZERO FIGHTER

老兵の回想

南京・真珠湾から終戦まで戦い抜いた
最後の生き証人

原田 要

滞空時間8000時間、日本が世界に誇った「零戦」を
駆って戦い交戦国から畏れられた歴戦のパイロット

南京攻略、真珠湾攻撃、ミッドウェー海戦、
ガダルカナル島争奪、幾多の戦場をくぐり
抜けた著者のみが語り得る本当の戦争論!

国の誇りを守った男たちの記録



長濱敏行

Toshiyuki Nagahama

激烈に 生きて

戦略爆撃

日本から始まった 「空爆の時代」

安富 歩

やすとみあゆむ／1963年大阪府生

まれ。東京大学東洋文化研究所教授。

『満洲国』の金融』『原発危機と「東大話

法』など著書多数。



陸軍の爆撃隊

一九三〇年、日本の国際的地位はその絶頂にあった。浜口雄幸内閣は四月にロンドン海軍軍縮条約に調印し、十月には首相が、英国のマクドナルド首相、米国のフーバー大統領と共に平和を訴えるラジオ演説を行い、全世界に放送された。ところが、その翌年には満洲事変が勃発して坂道を転がり始め、四五年の敗戦以降は今日に至るまで、米国の子分の地位を抜け出せないままである。

なぜこんなことになったのか。それにはまず「戦略爆撃」という概念を理解せねばならない。というのも日本は、中国に対して世界初の本格的戦略爆撃を実行し、アメリカからナパーム弾による残虐な本土空襲を受け、更に広島・長崎への核爆撃を経験したからである。その後も核兵器を背景とした空爆の時代が継続しており、世界情勢はその下で展開している。驚くべきことに、このテーマで日本語で書かれた本は、前田哲男『戦略爆撃の思想』しかないのだが、幸いにも名著である。旧版が一九八八年に、増補改訂版が二〇〇六年に出ている。

大日本帝国の最大の悲劇は、自分の戦っている戦争の本質を、最後まで理解しなかったことである。かくて日本軍は、徹頭徹尾、不合理な戦いを展開した。その本質を掴むには、大江志乃夫『天皇の軍隊』と森嶋通夫『血にコクリコの花咲けば—ある人生の記録』をお勧めする。

大江は、陸軍幼年学校出身で航空士官学校在学中に敗戦を迎え、戦後、歴史学者となった。森嶋は日本人として最も世界的に名の知れた経済学者であるが、彼は学徒出陣で海軍に入り、大村航空隊の通信将校として、特攻隊・戦艦大和の最後の出撃・沖縄戦などの通信を担当した。彼らは共に日本の軍隊を内側から体験し、戦後に外側から精密に分析した。

これらの書物を読んで私は、大日本帝国を滅亡に導いた病理が、今も変わることなく、我々の日々の生活を律する指導原理となっていることを思い知った。あの戦争は、昔の話ではまったくくない。

新訂版

戦略爆撃の 思想

ゲルニカ

重慶

広島

Maeda Tetsuo

前田哲男



賞 凱風社

天皇の軍隊

● 帝国陸海軍の特質と全貌

昭和の歴史



3

大江志乃夫

小学館

血に
コクリコの
花咲けば

ある人生の記録

森嶋通夫

Morishima Michio

朝日新聞社



兵士

神から犠牲者へ

一ノ瀬俊也

いちのせとしや／1971年福岡県生まれ。埼玉大学教養学部准教授。著書に『日本軍と日本兵 米軍報告書は語る』『皇軍兵士の日常生活』など。



靖国神社

自衛隊の「軍隊」化が議論になっている。「軍隊」について、まずはあの戦争の兵士の経験に学ぶことから始めてはと思う。

田中雅一編『軍隊の文化人類学』（風響社）は、平時における軍隊を一つの「文化集団」ととらえ、その構成員——兵士たちの思考・行動様式の解明を試みた論文集だが記述は平易。戦前日本の「殉職」した兵士や警官を神として祀る行為、戦意昂揚のため開催された戦争博覧会とそこでの兵士の描かれ方を問う。

戦前、戦死した兵士は神と祀られ、傷痍軍人は尊敬の対象として展示するという社会的合意が存在した。しかし敗戦後の兵士たちは博物館では悲劇的な犠牲者としてのみ描かれ、「殉職」した「兵士」すなわち自衛官は各護国神社に合祀されても戦前の戦死者の副次的な扱いに留まっている。

この事実を現代に重ね合わせると、自衛隊の「軍隊」化の可否は、その名誉性を社会がいかに合意、表現できるかにかかっていよう。

同書の複数の論文が現在の自衛官、とくに女性自衛官をテーマとしている。彼女たちは「キャリア形成」の手段として自衛隊を選択しているように読める。この戦争と女性という問題について、第二次大戦のソ連軍女性兵士たちへの聞き書き集であるスヴェトラナ・アレクシエーヴィチ『戦争は女の顔をしていない』（群像社）は示唆的だ。


ある女性兵士は勲章を手に凱旋帰宅したところ、母親に妹たちが嫁に行けないから家を出ていけ、と言われた。我々はこの〈偏見〉を遠い昔の異国の話と済ませられるだろうか。歴史はどこかでつながっている。

デーヴ・グロスマン『戦争における「人殺し」の心理学』（ちくま学芸文庫）によると、第二次大戦中の米軍兵士中、実際に生身の敵兵に発砲できた者が二割程度に過ぎなかった。これを憂慮した米軍は兵士の訓練プログラムを改め、その後発砲率は急上昇した。「軍隊」は、こうした問題との対峙を必要とするのだ。

軍隊の 文化人類学

田中雅一編

風響社



У ВОЙНЫ НЕ
ЖЕНСКОЕ
ЛИЦО.

戦争は 女の顔を していない

スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ
三浦みどり 訳

群像社

デーヴ・グロスマン
Dave Grossman
安原和見 訳

戦争における 人殺しの心理学

ON KILLING

The Psychological Cost of Learning to Kill
in War and Society

ちくま学芸文庫

沖縄戦

極限状況を 追体験する

又吉栄喜

またよしえいき／1947年沖縄県生

まれ。琉球大学法文学部史学科卒業。

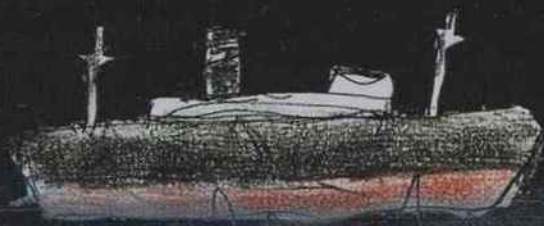
96年「豚の報い」で芥川賞を受賞。他

の著書に『漁師と歌姫』など。



米兵が炎を放つ

多くの思想家、戦争研究者等がいろいろな角度から「沖縄戦」を分析し、日記、ルポ、ノンフィクション、ドキュメンタリー、体験談、写真等の形を通し「戦争論」「戦争観」を論じている。大多数の国民は（悪意はないにせよ）戦争は遠く離れた世界の出来事だと考えているという考察もある。我が身と無縁ではないと気づくためには（過去の）戦争を真摯に追体験すべきだと思われる。①『平和への証言』（沖縄県生活福祉部編）は沖縄県立平和祈念資料館ガイドブックと銘打っているが、詳細に沖縄戦の全貌が俯瞰できる。且つビンポイントのように光が当たり、沖縄戦の深い実相が浮かび上がる。第一展示室は決戦教育、陣地づくりなどの「沖縄戦への道」、第二展示室は死の彷徨、ガマなどの「戦場の住民」、「証言の部屋」の第三展示室では南部撤退、死の道連れ等の一般住民の体験が記されている（初期の展示構成です。現状とは異なります）。想像を絶する極限状況の中、追い詰められる人々の呻吟の音が聞こえる。②『白梅』（白梅同窓会編著）。戦争体験者は長く「声」を発せず、講演や体験集の刊行は困難を極めたが、ようやく限りがある寿命や、生き残った者の使命を自覚し「白梅学徒看護隊」を出版し、県内外の学生や一般の人の平和学習に役立てているという。校舎を焼失した十・十空襲、第24師団第1野戦病院、学徒たちの最期等の状況が読者に迫る。体験者でなければ見えない、感じられない「戦争」が微細に生々しく描かれ、看護隊の一人一人の決死の行動を私たちも追体験する。③『対馬丸』（大城立裕）。学童疎開船対馬丸は米軍の潜水艦ボーフィン号の魚雷攻撃を受け、世界屈指の深海といわれる悪石島沖に沈んだ。1661人の乗船者の内、生存者は177人。多くの学童は疎開を修学旅行と勘違いしたり、疎開先での楽しい勉学を夢見ていたという。無垢の学童の心や、日本軍の勧めるままに子供を送り出した親の、胸をかきむしるような気持ちも浮かび上がらせている。「子供の頃から戦争の足音に敏感になるべきだ」という著者の深く沈められたメッセージも伝わる。



oshiro tatsuhiko

大城立裕

tsushimamaru

対馬丸



講談社
文庫





文春e-Books

戦後70年記念企画

半藤一利・佐藤優 初対談

あの戦争を知るために今こそ読むべき本はこれだ！

2015年6月20日 発行

編集 週刊文春編集部

発行者 村上和宏

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23

郵便番号 102-8008

電話 03-3265-1211

2015年夏映画化作品原作

日本のいちばん長い日（決定版） 運命の八月十五日

半藤一利



近代日本の「運命の一日」を描いた不朽の名作。太平洋戦争を終結させるべく、天皇の「聖断」に従い和平への努力を続ける首相鈴木貫太郎をはじめとする人々と、徹底抗戦を主張して蹴起せんとした青年将校たち——。玉音放送を敢行しようとする政府関係者に対して、陸軍の一部軍人は近衛連隊を率いて皇居に乱入した。そのあまりにも対照的な動きこそ、この一日の長さを象徴するものであった。玉音放送が流れた昭和二十年八月十五日正午に至る一昼夜に繰り広げられた二十四幕の人間ドラマ。2015年8月公開の同名映画原作。

[本の紹介ページへ](#)

〈ご注意〉

本作品の全部または一部を、著作権者ならびに株式会社文藝春秋に無断で、複製（コピー）、転載、改ざん、公衆送信（ホームページなどに掲載することを含む）することを禁じます。万一このような行為をすると、著作権法違反で処罰されます。

〈お断り〉

本作品を電子書籍化するにあたり、一部の漢字が簡略体で表示される場合があります。また、ご覧になる機種により、表示の差が認められる場合があります。

[冒頭に戻る。](#)